



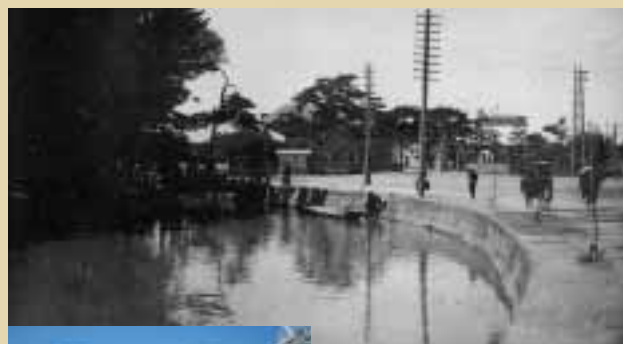
■写真1(上)新潟市街空撮  
写真2(左)新潟市街を流れる信濃川。右側が「新潟島」



# あの頃の風景

株式会社千代田コンサルタント  
荒井裕則 ARAI Yasunori

## 千曲川・信濃川編 第3回 「堀の町」新潟



■写真3—明治後期～大正(上)  
主に米穀類を運んだ白山堀。正面に物産陳列館(現市役所)を望み、手前には今も残る老松  
■写真4—現在(左)



■写真5—明治後期～大正(上)  
正面は白山堀。右には明治16年にたてられた新潟会議堂(現県政記念館)  
■写真6—現在(右)



日本一の大河・信濃川の河口に位置する日本海側最大の都市・新潟市。平成19年4月に、人口81万人の政令指定都市となった。

「新潟」とはそもそも、信濃川河口に広がる新潟平野に点在する潟湖の名前の一つであったのだが、今では県名にもなっている。

もともと、この地は低湿地である「潟」を開いて稲作を行ってきた。信濃川や阿賀野川の治水を行い、自然と共存して暮らしてきた。江戸時代には「新潟湊」として、このあたり一帯で取れる米を北海道や上方、江戸へ運ぶ北前船の寄港地として物流拠点の重要な役割を果たしていた。

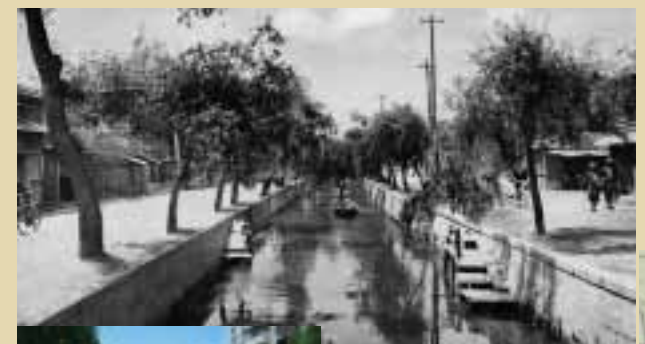
日本海、信濃川、関屋分水路に囲まれた新潟市中心の「新潟島」には、今も旧新潟税関の庁舎や港稲荷神社など、その当時の港町・新潟として栄えていた面影が残っている。

町の中には堀が設けられ、北前船から荷物を積み換えた小舟が行き交っていた。薪や炭、野菜などの生活必需品も運ばれ、品物を売ったり、加工したりする商売が盛んであった。堀は、自由な商いを行うための重要な流通手段として新潟の人々を支えていた。

もともと新潟町は、現在の場所ではなく新潟砂丘の一面にあったが、1655(明暦元)年に中州へ移転した。堀の町・新潟の起源である。それ以後、堀と通りが町づくりの軸になっていったのである。

堀は縦横無尽に張り巡らされ、縦堀はどの屋敷にも接するように配置され、横堀は信濃川からの運び込み、町からの運び出しに使われていた。また、米を運ぶための堀や野菜や魚を運ぶための堀としても使い分けられ、流通に関する当時の人々の知恵が伺われる。堀が埋め立てられた昭和期まで、町内には5本の横堀と2本の縦堀が整備され使われ続けた。

堀の大きさは、主に米穀類を運んだ白山堀が幅14間(約25.2m)、深さ3尺(約0.9m)で一番大きく、それ以外は幅4間(約7.2m)、深さ2尺(0.6m)であった。横堀には堀の両側に



■写真7—昭和初期の西堀(上)  
新潟を象徴する堀と柳のあった風景  
■写真8—現在(左)

3間(約5.4m)の小路が付いていた。縦堀には当初、小路が付いていなかったが、後に両側に小路が付けられた。それらの小路には、桜や柳が植えられ、堀、通り、樹木が町独特の情緒ある雰囲気を作り出していた。堀の周りには料亭が軒を連ね、堀端の桜や柳の下を新潟美人が行き来し、また橋の上ではお祭りが行われるなど、新潟の町は賑わいを見せていた。

しかし、町を抜ける信濃川の水位が低下し、さらに天然ガスの採取による地盤沈下もあり、堀の水は淀んでいった。そして、悪臭が漂い始めると、市民から嫌われるようになり、高度成長期も手伝って昭和39年の新潟国体の開催を前に、堀はすべて埋め立てられることになった。経済発展や道路開発による交通の変化によって、その度に改良されてきた堀ではあったが、300年あまりの歴史にピリオドが打たれたのである。

埋め立てられた堀はすべて道路になった。そのため、江戸時代以降の市街地の区画をほとんど無傷に保ちながら、現在の基盤の目の交通網は整備された。これは、堀を使っていた時代からの大きな遺産といえる。

現在では、写真や絵はがきでしか、堀で賑わった当時のことを知るすべはないが、掘割再生プロジェクトとしてNPOも活動を広めており、「堀の町であった美しい新潟を忘れない」という市民の心は今後も受け継がれるであろう。

3回に渡りお届けした千曲川・信濃川を巡る「あの頃の風景」はいかがでしたか。あの頃と今の風景から私たちの国土や生活の変遷を感じていただけたでしょうか。次回は来年4月から「あの頃の風景」をお届けします。

- <参考文献>  
1)「第1回企画展2004にいがた街の記憶」新潟市歴史博物館  
2)「寄稿文—堀と新潟(1)、(2)」建設コンサルタント協会北陸支部

- <取材協力>  
1)新潟市総務部歴史文化課  
2)財団法人新潟観光コンベンション協会

- <写真提供>  
写真1、2 財団法人新潟観光コンベンション協会  
写真3、5、7、図2 新潟市  
写真4、6、8、9 著者  
図1 新潟市歴史博物館



■写真9—当時の早川堀のイメージを復元。国の手作り郷土賞を受賞した水路



■図1—大正14年の信濃川及び主な堀の位置



■図2—賑わっていた当時、堀が交差する四つ橋上で盆踊りをする人々